

令和八年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜 定時制の課程

Ⅱ 国 語

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は **問四** までであり、1 ページから13 ページに印刷されています。
- 3 解答用紙の決められた欄に解答しなさい。
- 4 マークシート方式により解答する場合は、選んだ番号の ○ の中を塗りつぶしなさい。
- 5 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受 検 番 号

番

問一 次の問いに答えなさい。

(ア) 次の a ～ d の各文中の——線をつけた漢字の読み方として最も適するものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- a 優勝旗を奪還する。 (1) けんじょう 2 へんかん 3 だっかん 4 そうだつ)
b 舞台での演技は完璧だった。 (1) あっかん 2 かんぜん 3 ばんぜん 4 かんぺき)
c しょうゆを地下に貯蔵する。 (1) ちよぞう 2 ちよちく 3 かくのう 4 ちくせき)
d 山々が夕日に映える。 (1) さ 2 は 3 まじ 4 そび)

(イ) 次の a ～ d の各文中の——線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- a 隣国とシンゼンを深める。
1 いちじるしくシンポする。 2 シンリンの減少による生態系の破壊を防ぐ。
3 結婚式でシンゾクを紹介する。 4 君主がシンカに外交について問う。
b 何日か温泉宿でトウジし体調を整える。
1 器材をネットウで消毒する。 2 暖房器具に入れるトウユを買う。
3 活発なトウロンが行われる。 4 コーヒーにサトウを一さじ入れる。

- c ヘイイな言葉遣いで表現する。
1 イシとなるために免許を取得する。 2 チャクイを整え面接に臨む。
3 イサンを抑える薬を服用する。 4 無駄を省いたカンイな包装にする。

- d 二人の身長をクラべる。
1 作品の評価にサンピが分かれる。 2 色彩のヒリツを変える。
3 生命の起源のシンピを探る。 4 ヒガンの全国制覇を達成する。

(ウ) 次の各文のうち、敬語の使い方が適切でないものを一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 土曜日の午後にかがいます。
2 雨が降る前に早くお帰りください。
3 お客様を建物の外まで迎えに参ります。
4 新鮮なうちに果物をいただいてください。

(エ) 次の文章中の [] に入れることわざとして最も適するものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

姉が商店街の福引きで春休みの旅行を当てた。他に行ける人がいなかったたので、思いがけずも私が一緒に行くことになり、名所や名物を楽しむことができた。まさに [] だと思った。

- 1 棚からぼた餅
2 雨後のたけのこ
3 青菜に塩
4 豆腐にかすがい

- (オ) 次の例文中の――線をつけた「に」と同じはたらきをする「に」を含む文を、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

例文 新しい飲食店が駅前に開店した。

- 1 晴れているのに雷の音が聞こえる。
- 2 列車がまさに出発しようとしている。
- 3 山の上に白い雲がかかっている。
- 4 実習先へのお礼状を丁寧に書く。

- (カ) 次の短歌を説明したものととして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

鳥のかげ窓にうつろふ小春日に木の寒こほまるおとしづづかなり

かねこ
金子
くんえ
薫園

- 1 初冬の暖かい日中を背景とし、空を飛んでいた鳥が窓から入ってくるという動的な面と、樹木の種子の地面に当たる音という静的な面を並べて表現することで、鳥の動きをきわ立たせて描いている。
- 2 冬の初めの暖かい日中を舞台に、窓越しに見える鳥のかげという目で捉えたことと、樹木から離れた種子が地面に当たるかすかな音という耳で捉えたことを交えて、穏やかなひとときを描いている。
- 3 初冬の暖かい日中を背景に、窓の向こうにいる鳥の羽ばたく音がしたこと、樹木の種子が地面に当たるところを目にしたのに音がかき消されたということを、種子の動きに着目して描いている。
- 4 冬の初めの暖かい日中を舞台に、窓には鳥の姿もかげも見えずに鳴き声が聞こえ、その後に樹木の種子が地面に当たるかすかな音を耳にしたことで、周囲が静まったことに気づく様子を描いている。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学校二年生の「戸田柚葉」は、物語を書くことを心の支えにしていたが、書いた物語が、「紗英」と「藍」、「ちひろ」を始めとする同級生たちに笑われたことをずっと気にしていた。ある日、「柚葉」は、自身の投稿した物語が使われたラジオの公開収録の現場で「朝佳」と出会った。「朝佳」は同じ中学校に通う二年生で、足の怪我のために陸上部を休部して落ち込んでいた。二人は仲良くなり、「朝佳」は「柚葉」に声を褒められたことをきっかけに朗読を始めた。「朝佳」が「柚葉」を説得し、「柚葉」の書いた物語を「朝佳」が朗読するライブが、文化祭で行われることになった。練習を重ねて本番を迎えたが、「朝佳」の調子が上がらず、ついに朗読が止まってしまった。

隣の朝佳を見ると、制服のスカートからすらりと伸びた彼女の足が小刻みに震えていた。過度の緊張で声が出ないのかもしれない。

客席が、ふたたび始まらない朝佳の朗読にざわざわしはじめた。手に汗を握って見守るうちに、幾人かの生徒からくすくす笑いが漏れ始める。

朝佳が、笑われている。その事実には、心がかっと熱くなった。

すぐさま、一年生の夏に自分が教室で笑われたことが重なり、強い怒りが湧く。いけない、冷静にならなくちゃ。どうすればいい――？

三秒ほど思案し、はっとひらめいた打開策があった。でも、それには、柚葉のなかのすべての勇気をかき集めてもまだ足りないほどの強い決意が必要だった。けれど迷うよりも先に、気づけば柚葉は椅子から立ち上がっていた。

どよめきのなか、呼吸をひとつとして、心を落ち着かせる。朝佳に習った腹式呼吸だ。柚葉は譜面台をのぞきこむと、朝佳が読み終えた箇所から、その続きを引き取って読み始めようとした。そんな柚葉を、朝佳が驚いたように見つめる。

（朝佳ちゃん、ここは私にまかせて。）

柚葉はそんな思いをこめて、朝佳に目配せした。客席は一瞬ざわついたのち、波が引くように静まる。自分の声が頼りないのは知ってる。朝佳みたいに上手に読めたりはしないし、響き渡りもしない。でも、ここでやるしかない。

決意のままに柚葉が改めて顔を上げ、図書室内を見渡したそのときだった。柚葉の目に、図書室後方の入り口のほうに固まっている女子三人が目に見え込んできた。

ちひろと紗英と藍だ。三人の登場に、思わず動揺してしまう。ちひろは、柚葉を見定めるように、陰しい表情で腕を組み、藍と紗英はかたずをのんでこちらを見ていた。柚葉の足から、ぶるりと震えが這い上がる。それでも、顔を上げた。

（ここで朝佳ちゃんを一人にはできない……！）

続きを確認し、読み上げ始める。出した声が頼りなく震えた。ほんとは怖くて仕方ない。でも、柚葉の頭のなかには、朝佳が今朝が話してくれた言葉が瞬間浮かんでいた。

（『あのね、夏目さんが言っていたんだけど、一番後ろにいる人にまで聞こえるような声を出すイメージで読むといいらしいんだって！ よーし、がんばらなきゃ！』）

図書室の一番後ろにいる人——それはちひろたちにはかならない。柚葉は息を吸い込むと、声のリズムを三段階ほど上げた。

2 笑うなら、笑ってみなよ。柚葉は声を出しながら思う。紗英が、藍が、ちひろと一緒にこの物語を笑ったとしても、自分は胸を張って読む。自分自身と書いた物語を信じる気持ちをくれた朝佳のかわりに、このライブを最後まで――。

おなかの底から声を出しながら、柚葉はちひろが図書室の後ろの入り口から出ていくのを見た。紗英と藍は、ちひろの後を追っていかない。二人は、そのまま柚葉の朗読を真剣な眼差しで聞いていた。

中盤まで読み、柚葉がひと息ついたそのとき――柚葉の制服の袖を、朝佳が引っぱった。隣をはっと見やると、そこには落ち着いた表情をしたいつもの朝佳がいた。

3 「柚葉ちゃん、ありがとう。もう大丈夫。」

朝佳の顔つきを見て、柚葉は確信した。ああ、もう心配ない、と。

目配せした柚葉に朝佳はうなずき、譜面台の正面に立った。そして、はりのあるよく通る声で、続きを読み始める。

最初のひと声が図書室の後ろまで響くやいなや、客席が一瞬あつげにとられたのち、朝佳の朗読にどんな惹き付けられていくのが柚葉から見てもわかった。

隣で耳を傾けるうちに、柚葉は思わず涙ぐんでしまう。自分の書いたストーリーが、朝佳の放ついきいきとした言葉によって、みるみる命が吹き込まれてゆく。それを間近で見られるのは、本当に書き手としてこの上ない喜びだった。

物語が読み終えられるなり、図書室じゅうを温かい拍手の音が包んだ。いつまでも鳴りやまない拍手に、柚葉は胸をなでおろす。

「柚葉ちゃん。」

安心していた柚葉に、朝佳が片手を差し出した。その手をとって、再度立ち上がる。朝佳は、柚葉の手を握ったまま、話し出した。

「みなさん、今日このストーリーを聞いてくれて、ありがとうございます。このストーリーを書いたのは、ご紹介のとおり、私と同じ二年生の戸田柚葉さんです。私は柚葉さんに出会ったところ、大好きだった陸上を続ける気持ちを失って、落ち込んでいました。でも、柚葉さんが物語を書くことにチャレンジしているのを見て、私も『朗読』という新しい好きなことを見つけられました。」

その告白に、希望とぬくもりがじわじわと柚葉の心に広がっていく。

「――今日はみなさん、最初はうまく読むことができずに、お見苦しいところを見せてしまっ、ごめんなさい。」

4 朝佳は深々とお辞儀をした。おわびの言葉をフォローするように、また拍手が客席から生まれる。

「でも、みなさんに柚葉さんの作品を聞いてもらえて、本当に私はやってよかったなと思いました。それで、お願いがあります。もしよかったら、何か感想を言ってください方、いらっしやいませんか?」

朝佳が急に客席に問いかけたので、柚葉は焦った。

(ちよっと、朝佳ちゃん、アドリブ質問なんて聞いてないよ!?)

一瞬間があったあと、客席から、知らない男子生徒の野太い声が上がった。

「正直、最初は下手すぎって思った!」

その容赦ない言葉に、柚葉はびくりと固まった。隣の朝佳がどんな表情でいるのか、怖くて確かめられ

ない。しかし男子生徒はにやりと笑うと、両手をメガホンにして大声で続けた。

「でも、交替したところは胸熱だったし、後半はすげー良かった！」

とたん、爆発するように賛同を意味する拍手が湧き起こった。ふいうちすぎる称賛の言葉は、柚葉の心を射抜いた。だめだ、涙が出てくる。そのあとも温かな声援が立て続けに送られた。

「止まってびっくりしたけど、いいお話でしたー。」

「トラブル挽回ばんかいできてよかった！」

「二人のタッグ、また聞きたいですー！」

⁵ 背を丸め、柚葉は今度こそ泣き崩れた。また聞きたいって言ってもらえることって、こんなに嬉しいんだ。

客席の後ろで、^(注)南美がふいに椅子をがたんと鳴らして立ち上がった。

「朝佳！」

彼女に呼ばれた朝佳が、はっと姿勢を正した。その女の子は、大きな声で叫ぶ。

「チャレンジしっかり見届けたから！ 大事なライブ、呼んでくれてありがとうっ！」

ちよっと投げやりにも聞こえるその言葉が、逆に彼女の照れ屋な性格を表していた。隣の朝佳が満面の笑みで答える。

「南美！ 来てくれて、こちらこそありがとう！」

そのまま大きく彼女に向かって両手をぶんぶん振り回す朝佳に、南美と呼ばれた少女が噴き出した。この一幕に、図書室内は改めて大きな拍手と笑い声に包まれた。

図書室の片づけを終えて、朝佳と並んで廊下へ出た柚葉は、辺りを見回した。ライブ中、最後まで残っていたはずの紗英と藍の姿は、そこにはもうなかった。

朝佳が後ろからやってきたので、柚葉は振り返った。そのまま、向き直る。

「朝佳ちゃん。私、わかったんだ。」

「わかった？」

きよとんとした朝佳に、柚葉は言った。

「私いままで、誰かに笑われるのは怖いし、嫌だった。でも、笑われるってことは、何かをちゃんとやっただってという証拠なんだね。だから、これから笑われることがあったとしても『私は何かをやってみたんだ。』って思えたら、それは自信になっていくんだよね。」

朝佳が目をみはる。

「それって、すごいことに気がついたね。本当に、そうだと思う。」

柚葉は、朝佳に片手を差し出す。

⁶ 「朝佳ちゃんのおかげで、私、人生で忘れられない一日ができたよ。本当に、ありがとうね。」
朝佳は柚葉の手をぎゅっと握り返して、瞳を輝かせた。

「うん、私も最高の一日に——いや、失敗したから最高じゃないな、最低だけど最高だったな。リベンジしなきゃ！ 絶対！」

とこぶしを天に突き上げた。

(^{上田} 聡子「あの子の隣で待つ春は」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) 夏目さん「朝佳」に朗読の指導をしたことがある、朗読の仕事をしている俳優。

南美「朝佳」と同じく陸上部に所属する生徒。

(ア) 線1 「気づけば柚葉は椅子から立ち上がった。」とあるが、そのときの「柚葉」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「朝佳」が笑われたことと自身の過去の過去が重なって腹が立ち、冷静になろうと努めるうちに解決策を思いつき自身にとっては強い決意が必要だったものの、「朝佳」を助けようと衝動的に動いている。

2 「朝佳」を笑う声を聞いて自身が笑われたときのことが呼び覚まされて怒りを感じたが、予定通りに朗読を交替すればいいと思って冷静になり、「朝佳」を助けるために勢いよく動き出している。

3 「朝佳」を笑う声によって自身が笑われたときのことを思い出して怒りが湧いたが、心を落ち着かせようとするうちに解決策が頭に浮かんで、自身にできるのか悩んで迷った末に動き出している。

4 「朝佳」ではなく自身の作品が笑われているということに気づいて腹を立てたものの、冷静になつたときに事態を変えることにつながる朗読の交替という方法を思いつき、とっさに体が動いている。

(イ) 線2 「笑うなら、笑ってみなよ。」とあるが、そのときの「柚葉」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 自身に寄り添ってくれた「朝佳」にかわって最後まで朗読しようと、笑われることを気にしないようにして集中のあまり周囲が見えなくなりながら、自身の作品と「朝佳」のために声を出している。

2 客席からずっと聞こえてくる笑い声を気にしないようにして、自身の書いた物語を「朝佳」にかわって最後まで朗読したいと思い、自信をくれた「朝佳」のためにできる限り大きな声を出している。

3 自身と自身の書いた物語を信じる気持ちをつくれた「朝佳」にかわって、誰かに笑われたとしても気にせず最後まで堂々と朗読をやり遂げようと思って、気持ちを奮い立たせて声を出している。

4 自身の作品に対して信じる気持ちをもてたことはないが、物語を朗読してくれた「朝佳」のために最後までやり遂げようと思い、笑われても気にしないようにしてできるだけ大きな声を出している。

(ウ) 線3 「柚葉ちゃん、ありがとう。もう大丈夫。」とあるが、ここでの「朝佳」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 自身のかわりに朗読した「柚葉」に感謝しつつ、朗読を再開するための心の準備が整わないままに途中から引き継ぎようとして焦っているように読む。

2 自身にかわって朗読した「柚葉」に感謝しつつ、交替したらずぐに上手な朗読を披露したいという思いが表情に表れるほど興奮しているように読む。

3 交替して読んでくれた「柚葉」に感謝しつつ、朗読が止まった自身へのふがいなさに対する怒りのために平静でいられなくなっているように読む。

4 朗読を交替してくれた「柚葉」に対して感謝しつつ、心の落ち着きをすっかり取り戻して自身が続きを引き受けようと心に決めているように読む。

(エ) 線4 「朝佳は深々とお辞儀をした。」とあるが、そのときの「朝佳」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「柚葉」に対して後ろめたい思いを抱きつつも、物語を聞いてもらえたことに対して感謝すると同時に、物語の最後までずっとうまく朗読できなかったという事実を客席に対して謝罪している。

2 物語を書くことに挑戦する「柚葉」の影響で好きなことを見つけられたという思いをもち、朗読を聞いてもらえたことに感謝しつつ、思っていたようにはできないところがあつたことを謝っている。

問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

嘘をつかないような生き方をしている人のことを「正直だ。」とか「誠実だ。」と言うことがあります。ではまず、正直であるとはどういうことでしょうか。

正直であるとは絶対¹に嘘をつかないことだ、という答えについて考えてみましょう。絶対に嘘をつかないということは、どんな状況にあっても、誰に何を聞かれても、必ず、自分がそう信じていることをそのまま口にするということでしょう。ということは、本当のことを言えば周りからかわれたり、あるいは人命が危うくなったりするような場合でも、やはりそのまま自分が信じている通りのことを言うことになります。

自分や他人を守るために必要な場合でも、思ったことをそのまま無防備に口にすることが、尊敬の念を込めて正直と呼ばれる人の生き方でしょうか。どうもそのようには思えないのではないでしょうか。全く嘘をつくこともなく、このような状況なら嘘をついてもよいんじゃないか、という心のブレもないとなると、「馬鹿正直」という言葉があるように、A正直なのかもしれないけれど、思慮に欠けるように感じられるようです。

自分や他人を傷つけても嘘をつかずに思ったままのことを言う人は、多くの傷を負い、多くの傷を与えてでしょう。そのような痛ましい状況に対して、「馬鹿」という言い方で済ませることが適切には思えません。では、嘘をつかないあり方が正直であり、正直であることはガラス張りの状態になることではないのであれば、それはどういう生き方なのでしょうか。

私たちは時として「あの人は正直な人だ。」と、その人の立派さを認めて言うことがあります。それはどういう人のことでしょうか。

ドイツの教育哲学者であるオットー・ボルノー（一九〇三〜九一）は、「率直」と「正直」を区別し、「率直」が「まだ特別な内面性を形成し遂げる以前の状態にある」のに対して、「正直でありうるのはつねに、自分自身に対してとられれず自由な態度をとるか、それとも自分自身を見捨てるかという二つの可能性を自らのうちにもっているような存在だけである。」と述べています。

まず、「率直」である²というのは、ごまかしや嘘がなく、自分が信じていることをそのまま言い、自分が信じていることと言っていることが一致していることです。「絶対に嘘をつかない人」として先に見たようなあり方は、この意味で「率直」だとは言えます。ボルノーによれば、このような率直さは「まだ特別な内面性を形成し遂げる以前の状態にある」のであり、つまりは、まだ嘘をつくことのできない子どもに見られる状態です。他人に対する不信を知らず、内面を隠すことを知らない状態であり、事実として嘘をついていないとしても、「嘘はつかないぞ。」という意志を自らで働かせたわけではありません。

「嘘はつかないぞ。」という自発的な意志を働かせるためには、嘘をつく能力を身につけている必要があります。内面を隠したり、他人を騙^{だま}す意図をもったりすることができる限りで、「嘘はつかないぞ。」という決断もできるのです。つまり、嘘をつかないという自発的な意志を働かせるためには、自分の都合が悪くなれば嘘をつく誘惑にかられてしまったり、本当のことを言ったら周りにからかわれると分かれば嘘についてその場をしのぐ技術をもっていたりしなければなりません。自分が信じていることを隠しておくことができなくてはならないのであり、つまり、ボルノーの言うように「特別な内面性を形成し遂げている」必要があります。単に「率直」のではなく「正直」であるためには、社会がどこかというところかある程度認識しており、ある状況に陥れば嘘へと誘惑されるような心の側面をもっていなければならないわけです。

実際、「あの人は正直だ。」と賞賛を込めて言われる人は、全く無垢^{むく}な人ではなく、普通の人であればいい嘘をついてしまうような場面でも、ぐっと思いとどまってそうしない、そういう精神的な力をもっている人でしょう。嘘をつけば利益を得られそうな場面、嘘をつけば不都合な状況を取り繕うことができそうな場面、あるいは、嘘をつけば表面的には人間関係を維持できそうな場面で、やっぱり、嘘をつくのはい止^やめようと思いとどまり、自分が信じていることを正直に言ったり、相手とオープンに話し合うために努力したりする人でしょう。

ボルノーの言葉に戻りましょう。正直な人は、「自分自身に対してとらわれず自由な態度をとるか」、「自分自身を見捨てるのか」という二つの可能性の間で葛藤する存在です。このような心の葛藤を経験できるといことは、正直に本当のことを言うか、嘘をついてその場をしのぐか、というジレンマに立っていることだと言い換えてもよいでしょう。

しかし、なぜ、嘘をついてその場をしのぐことは「自分自身を見捨てること」であり、本当のことを言うことは「自分自身に対してとらわれず自由な態度」を取るものなのか。

嘘をつく、「嘘をついた。」と相手に言うことができず、また、一度嘘をつくとその嘘と辻褄^{つじつま}の合うように嘘を重ねるしかなくなります。言いかえれば、自分自身が相手にやったことや思ったことについて相手と自由に話すことができなくなり、どれほど後悔しても嘘をつく前には戻れないという苦しみがあります。B、成り行きに振り回され、自由を失い、自分が望むように振る舞えなくなってしまうのです。ここで、自分の気持ちを押し殺し、苦しみのなかに自分を閉じ込め、偽りのない人間関係を取り戻す希望も失ってしまうとすれば、ボルノーが言う「自分自身を見捨てる」ことになるでしょう。

しかし、嘘のせいで自分自身を見捨ててようになって、私たちには「自分自身に対してとらわれず自由な態度」をもつ可能性も残されているとボルノーは述べています。友達と遊んでいたらつい楽しくなると恋人との約束に遅れてしまった時、自分の不都合を取り繕うために何気なくついた嘘が大きくなってしまう、恋人に悪いと思ってもらっては嘘だったと言えない時、自分の思っていることや自分が今日したことなどをオープンに話せる仲がどれだけ貴重であるかが身にしみるでしょう。その気持ちに忠実になるなら、どんなに謝ることになっても、あるいは呆^{あき}れられることになっても、本当のことを話そうという勇気をもてるかもしれません。そして話してみたら、恋人は呆れることも、謝ることを求めることもなく、「気にしないでいいよ。」と言ってくれるかもしれません。その時には、相手はどうせ怒るだろうと決めつけていた自分の小ささに恥ずかしくなるかもしれません。自分自身に対して自由な態度をもつということ、さまざまな思い込みや恐れにとらわれずに、自分に素直に、自分らしくあることだと言えるでしょう。

嘘をついて自分を失ってしまう可能性と自分に忠実に自分らしくある可能性の間で、葛藤できる心(内面性)をもっていることが、正直であることには必要です。正直であるために必要なのは、裏表がないことではなく、嘘をつきたくなるときにぐっと思いとどまる意志であり、嘘をついてしまった時にも本当のことを話そうとする意志を失わないことです。以上のことから興味深いことに気づかされます。正直であることは、一方で他人に対して嘘のない生き方であり、つまり、他人を傷つけたり他人の利害関心を決めつけたりすることへの抵抗があり、他人とオープンに對話することを求める生き方だと言えます。しかし同時に、正直であるとは、自分自身を大切にすることであり、自分らしくあることを切望することなのです。

(池田 喬「嘘をつく」とはどういうことか」から。一部表記を改めたところがある。)

(ア) 本文中の **A**・**B** に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | |
|-----------|-------|---------|--------|
| 1 A たしかに | B つまり | 2 A さらに | B ただし |
| 3 A したがって | B では | 4 A むしろ | B ところで |

(イ) —線1「絶対に嘘をつかないこと」とあるが、そのことについて筆者はどのように述べているか。それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自分が本当だと思っていることをいかなる状況でもそのまま相手に伝えているので、相手に対して誠実な態度だと言え、自分や相手を傷つけることはない。
- 2 自分が信じていることをいかなる状況でもそのまま相手に伝えてはいるが、思慮に欠けるように感じられる場合があり、自分や他人を傷つけることがある。
- 3 いかなる状況にあっても自分が本当だと思っていることをそのまま相手に伝えているので、嘘とは無縁であり、他人から尊敬の念をもたれるべきである。
- 4 いかなる状況にあっても自分の信じることをそのまま相手に伝えてはいるが、自分は傷つくことがないのに相手を傷つけているので、尊敬されることはない。

(ウ) —線2「『率直』である」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 相手に対してごまかしたり嘘をついたりすることがなく、自分が信じていることを相手に話せるようになっていく状態のことであり、特別な内面性を形成し遂げているかは関係がないということ。
- 2 他人への不信はないが、自分の内面を相手に隠そうと気をつけている状態であり、話している内容と自分の頭に浮かんでいることが近いときでも、ありのままを伝えているわけではないということ。
- 3 他人に対する不信を知らず、自分の内面を隠すことを知らない状態であり、話す内容が自分の信じることと一致しているが、自分の意志を働かせ嘘をつくかどうか選択しているのではないということ。
- 4 相手に対して自分が信じていることをいつでもそのまま伝えていくだけでなく、絶対に嘘をつかないという意志に従って生きていく状態のことであり、特別な内面性を形成し遂げているということ。

(エ) —線3「『あの人は正直だ。』と賞賛を込めて言われる人」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 社会がいかなる場所かまだ認識していないものの、自分の信じていることを隠せるようにはなっており、嘘をつきたくなったときには気持ちを抑えられるという、自分の都合に左右されない人のこと。
- 2 社会がいかなる場所かを認識しており、隠す気になれば自分の内面を隠すことができるが、嘘をつきたくなるときでも思いとどまって本当のことを言うという、精神的な力をもっている人のこと。
- 3 社会に対する認識をもち、自分の考えていることを隠すことができるようになっていく上に、嘘をついているにもかかわらず相手に気づかせずに状況を取り繕っているという、裏表のある人のこと。
- 4 社会に対する認識をもっているが、自分の考えていることを隠す能力をもっておらず、自分の都合が悪くなる状況であっても嘘をつきたくなる誘惑にかられることがないという、無垢な人のこと。

(オ) — 線4 「ボルノーが言う『自分自身を見捨てる』こと」とあるが、それを説明したものと最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自分が相手に嘘をつくとき、自分自身が相手にやったことや思ったことを話すのに影響はないが、嘘をついた後悔に苦しめられて、相手と偽りのない関係を取り戻す希望が失われるということ。
 - 2 自分が相手に対して嘘をつくとき、嘘を重ねていくことで嘘をつく前に戻れないという苦しみはなく、相手と自由に話せなくなると、相手との偽りのない関係が維持できなくなるということ。
 - 3 自分が相手に嘘をつくことで、自分が望むようには振る舞えなくなり、嘘をつく前に戻れないという苦しみに自分で自分を閉じ込め、相手との偽りのない関係を取り戻す希望まで失うということ。
 - 4 自分が相手に対して嘘をつくとき、自分が望むままに自由に行動できるかわりに、嘘をつく前には戻れないという苦しみにとらわれることになり、相手との偽りのない関係まで失われるということ。
- 線5 「自分自身に対して自由な態度をもつ」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 さまざまな思い込みや恐れにとらわれることなく、本当のことを言おうという気持ちに沿って、自分らしくあろうとしているということ。
- 2 さまざまな思い込みや恐れにとらわれて、自分の気持ちを押し殺しており、本当のことを言わないという意志を強くもつということ。
- 3 さまざまな思い込みや恐れを気にすることなく、自分と相手の気持ちを大事にしており、嘘によって不都合を取り繕っているということ。
- 4 さまざまな思い込みや恐れをこえて、相手の気持ちを大事にして自分らしさを抑えており、本当のことを話そうとしているということ。

(キ) 本文について説明したものと最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 ボルノーの考えを用いて、正直とは本当のことを話そうとする意志にこだわるのではなく、自分も他人も傷つかないようにする生き方だということを、正直と率直の違いを述べながら論じている。
- 2 ボルノーの考えに基づき、正直とは自分を大事にしつつ、自分を失うことと自分らしくあろうとするこの間で悩まずにいずれかにとどまることだということを、嘘を話題に用いて論じている。
- 3 ボルノーの言葉を引用し、正直とは他人を傷つけないように自分の本心を隠しつつ、自分の内面を語りたくなるときに思いとどまる生き方だということを、身近な出来事を例に用いて論じている。
- 4 ボルノーの考えをふまえ、正直とは嘘によって自分を失ってしまう可能性と自分らしくある可能性の間で葛藤し、自分らしくあることを切望することだということを、具体的な場面を例に論じている。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

魯(注)の国の法に、その所の者、他国へ行き、(使用人として働いている所への借金で帰ることができない)奉公して帰ることならざる者を、(使用人の)誰にてもあれ、その奉公人

を(借金を肩代わりし)買ひ取り、故郷へ戻せば、君(君主)より御褒美の金を下さるる作法なり。ある時、子貢(注)、魯の国(注)の者を買ひ戻

しけるが、御褒美の金は取るべきことにあらずとて、(注)辞退しけるに、孔子これを聞きたまひ、(お聞きになり)「辞退いた

すこと、(とんでもないこと)沙汰(注)の限りなり。」とて、いましめ仰せけるは、(誰もが同じく)「一人の行跡よきとて、おしなべてならざるこ

とは、せぬものなり。当時(今)はなすとても、後代までならざることも、せぬものなり。いま、魯の国、富め

る人は少なくして、貧しき人は多し。しかるに、『子貢が褒美の金を取らざるは、無欲にて見事なり。』など

と取り沙汰し、(評判を立て)かさねて、(加えて)褒美を取らぬ者多くなりゆかば、後々はいつとなく、奉公人を故郷へ買ひ戻す

者もなかるべし。さあらんときは、国のためにもならず、風俗(お)悪しくなるべし。」と、(注)いましめたまへり。

しかるに、子路(注)は、またあるとき、河のほとりを行く(ア)に、水におぼれたる者ありければ、急ぎ駆けつけ、

引き上げけるに、その人、(命の恩人)「いのちのおやなり。かたじけなきこと限りなし。」とて、持ち合はせたる牛を

おくりけるに、子路辞退にもおよばず、やがてもらひけり。孔子これを聞きたまひて、「子路が牛を

受けしは、子貢が金を取らざるより、はるかにまさりたり。子路にならひて今より後、水におぼるる者を

すくふ人、(注)多からん。」とぞ仰せける。

(世間一般の見方)俗眼より論ぜば、「子貢は無欲なり、子路は欲あり。」など、(言うだらうが)言はんずれども、聖人の後世をおもんばか

りたまふ上智、いとありがたきことなり。(すぐれた知恵)

〔(注)智恵鑑(ちえかがみ)から。〕

(注) 魯Ⅱ古代中国の国の一つ。

子貢Ⅱ孔子の弟子(前五二〇～前四五六?)。魯で活躍した。

孔子Ⅱ中国の思想家(前五五一～前四七九)。「聖人」と称される。

子路Ⅱ孔子の弟子(前五四二?～前四八〇)。

(ア) 線ア～エの中から、他と主語が異なっているものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 ア 2 イ 3 ウ 4 エ

(イ) 線1「辞退しける」とあるが、そのときの「子貢」を説明したものととして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 魯では、他国の使用人をやめて帰国した者が魯の君主に金を渡していたが、「子貢」は断った。
- 2 魯では、使用人を魯へ帰らせると魯の君主から金をもらえたが、「子貢」は受け取らなかった。
- 3 魯では、使用人を魯から他国へ帰す際に魯の君主に金を渡していたが、「子貢」は払わなかった。
- 4 魯では、使用人を魯から他国へ帰す際に魯の君主から金をもらえたが、「子貢」は要求しなかった。

(ウ) 線2「いましめたまへり。」とあるが、そのときの「孔子」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 誰もができるわけではない行動や後々にするのが難しいことはしてはならず、「子貢」の行動をまねる者が多くなったら、無理にでも使用人を帰らせようとする者が増えて人心がすさむと警告した。
- 2 誰もができるわけではない行動や先々にするのが難しいことはしてはならず、「子貢」の行動をまねる者が多くなったら、使用人を帰国させる者が多くなって人口が増加し風紀が乱れると注意した。
- 3 誰もができるわけではない行動や後の時代まで続かないことはしてはならず、「子貢」の無欲さをまねる者が増えたら、貧しい者の多い魯では誰も使用人を帰国させなくなり風紀が乱れると警告した。
- 4 誰もができるわけではない行動や将来にはできなくなることはしてはならず、「子貢」の無欲さをまねる者が増えたら、金持ちの多い魯でも使用人を帰国させなくなって人心がすさむと注意した。

(エ) 線3「多からん。」とあるが、そのように言ったときの「孔子」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 人助けとして牛を差し出したという「子路」の行動が、よい行いだとして世間で評判になったことで、これからは多くの者が「子路」をまねて困っている人に何かをあげるようになるかと考えている。
- 2 人命を救った「子路」がお礼として差し出された牛をもらわなかったことで、立派な人であるという評判が立ったので、これからは「子路」をまねてお礼を断る者が多くなるだろうと考えている。
- 3 人命を救った「子路」が一度断ったあとにお礼の牛を受け取ったため、一度断ることを立派な行動だとする意識が世間に広まるので、今後はお礼をすぐには受け取らない者が増えると考えている。
- 4 人助けをして牛をもらった「子路」の行動から、よい行いをしたときはお礼を受け取ってもよいという認識が世間に広まり、今後は多くの者が「子路」をまねて人の命を救うようになると考えている。

(オ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 世間の人々は褒美をもらわなかった「子貢」を無欲として、見返りを受け取った「子路」を欲張りだとするだろうが、「孔子」は後の世の中への影響を考えた上で、「子路」を高く評価している。
- 2 世間では褒美を断った「子貢」よりも、見返りを受け取った「子路」の方をすぐれていると評価するだろうが、「孔子」は後世にどのように伝わるのかを考え、「子貢」のことを高く評価している。
- 3 世間の見方は、見返りを受け取った「子貢」が欲張りで、褒美をもらわなかった「子路」が無欲だということになるが、「孔子」は後世への影響を考えた上で、「子路」のことを高く評価している。
- 4 世間の人々の考え方では、「子貢」を無欲と見なして、「子路」を欲張りだとすることが多いだろうが、「孔子」は後の世の中への影響を考え、両者の行為についてどちらも高く評価している。

(問題は、これで終わりです。)

受 検 番 号						氏名
0	0	0	0	0	0	
1	1	1	1	1	1	
2	2	2	2	2	2	
3	3	3	3	3	3	
4	4	4	4	4	4	
5	5	5	5	5	5	
6	6	6	6	6	6	
7	7	7	7	7	7	
8	8	8	8	8	8	
9	9	9	9	9	9	

受検番号は左から書くこと。

(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)				(ア)				問一
				d	c	b	a	d	c	b	a	
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4

カは四点、他は各二点

- ### 注意事項
- HBまたはBの鉛筆(シャープペンシルも可)を使用して、○の中を塗りつぶすこと。
 - 答えを直すときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。
 - 解答用紙を汚したり、折り曲げたりしないこと。

良い例	悪い例	
	線	小さい
	丸囲み	レ点
		はみ出し
		うすい

(キ)	(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)	問二
1	1	1	1	1	1	1	
2	2	2	2	2	2	2	
3	3	3	3	3	3	3	
4	4	4	4	4	4	4	

各四点

(キ)	(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)	問三
1	1	1	1	1	1	1	
2	2	2	2	2	2	2	
3	3	3	3	3	3	3	
4	4	4	4	4	4	4	

各二点、他は各四点

(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)	問四
1	1	1	1	1	
2	2	2	2	2	
3	3	3	3	3	
4	4	4	4	4	

各四点

Ⅱ 国語

正答表 (令和八年度)

問二						
(キ)	(カ)	(キ)	(工)	(ウ)	(イ)	(ア)
3	4	1	2	4	3	1
4点	4点	4点	4点	4点	4点	4点

問一											
(カ)	(キ)	(工)	(ウ)	(イ)				(ア)			
				d	c	b	a	d	c	b	a
2	3	1	4	2	4	1	3	2	1	4	3
4点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点

問四				
(キ)	(工)	(ウ)	(イ)	(ア)
1	4	3	2	4
4点	4点	4点	4点	4点

問三						
(キ)	(カ)	(キ)	(工)	(ウ)	(イ)	(ア)
4	1	3	2	3	2	1
4点	4点	4点	4点	4点	4点	2点